各論 1 規範

The Antitrust Guide, Supra, takes the position that:

"(C)onsiderations of jurisdiction, enforcement policy, and comity often, but not always, lead to the same conclusion: the United States antitrust laws should be applied to an overseas transaction when there is a substantial and foreseeable effect on the United States commerce; and, consistent with these ends, it should avoid unnecessary interference with the sovereign interests of foreign nations."

上記反トラスト指針は、以下の立場を採る:

管轄権、執行の政策、そして礼譲についての判断は常にではないが大抵、 同じ結論を導く:米国反トラスト法は、実質的かつ予見可能な効果を米国 商業にもたらすとき、海外の商取引に適用されるべきである。そして、そ れらの結果に一貫し、他国家の主権への不必要な干渉を避けるべきであ る。

要件抽出1、2

In Timberlane Lumber Co. v. Bank of America, supra at 614-15, the Court of Appeals for the Ninth Circuit adopted a balancing process in determining whether extraterritorial jurisdiction should be exercised, an approach with which we find ourselves in substantial agreement. The factors we believe should be considered include:

- 1. Degree of conflict with foreign law or policy;
- 2. Nationality of the parties;

ティンバーレインランバー社対バンクオブアメリカ、上記614-15、第9巡回控訴裁判所は域外管轄権が行使されるべきかの決定において、調和プロセスを採用しており、我々もこのアプローチに実質的に合意する。考慮するべきと我々が考える要素は、以下を含む:

- 1. 外国の法律または政策との抵触の程度
- 2 当事者の国籍
- (1) 外国の法律または政策と抵触していること
- ② 当事者が外国籍であること

要件抽出3~6

- 3. Relative importance of the alleged violation of conduct here compared to that abroad;
- 4. Availability of a remedy abroad and the pendency of litigation there;
- 5. Existence of intent to harm or affect American commerce and its foreseeability;
- 6. Possible effect upon foreign relations if the court exercises jurisdiction and grants relief;²
- 3. 違法容疑行為の米国における重要性と外国における重要性の比較
- 4. 外国における救済策の有無と訴訟係属の有無
- 5. 米国の通商を害しまたはそれに影響を与える意図の有無およびその予見可能性
- 6. 米国の裁判所が管轄権を行使し救済を認めた場合に、それが外交関係に与える影響
- ③ 違法容疑行為が外国よりも米国において重要であること
- ④外国において救済策および訴訟係属がないこと
- ⑤米国の通商を害しまたはそれに影響を与える意図があるもしくは予見可能性があること
- ⑥米国の裁判所が管轄権を行使した場合に、外交関係に影響を与えること

要件抽出7~9

- 7. If relief is granted, whether a party will be placed in the position of being forced to perform an act illegal in either country or be under conflicting requirements by both countries;
- 8. Whether the court can make its order effective;
- 9. Whether an order for relief would be acceptable in this country if made by the foreign nation under similar circumstances;
- 7. 救済が許可された場合、当事者が他国で違法行為を強制される立場に立たされないか、あるいは米国と外国で矛盾した要求を強制されないか
- 8. 米国の裁判所の命令を執行できるか
- 9. 救済命令が同様の状況の下で外国において発出された場合、米国においてそれは受け入れられるか
- ⑦救済が許可された場合、当事者が他国で違法行為を強制される立場に立たされること、あるいは米国と外国で矛盾した要求を強制されること
- ⑧米国の裁判所の命令を執行できること
- ⑨救済命令が同様の状況の下で外国において発出された場合、米国においてそれが受け入れられること

Since the London reinsurers do not argue that British law requires them to act in some fashion prohibited by the law of the United States, or claim that their compliance with the laws of both countries is otherwise impossible, we see no conflict with British law.

ロンドンの再保険企業は、英国法が彼らに米国法によって禁じられている 行為を行うことを求めているとは主張していない。また両国の法令遵守は その他の点では可能であると主張している。したがって、**米国法と英国法 の間で法の抵触はない**とみられる。

ー>当事者が他国で違法行為を強制される立場に立たされていない。さら に、米国と外国で矛盾していない

Nineteen States and many private plaintiffs filed complaints alleging that the defendants-four domestic primary insurers, domestic companies who sell reinsurance to insurers, two domestic trade associations, a domestic reinsurance broker, and reinsurers based in London-violated the Sherman Act by engaging in various conspiracies aimed at forcing certain other primary insurers to change the terms of their standard domestic commercial general liability insurance policies to conform with the policies the defendant insurers wanted to sell.

19の州および多数の民間の原告が国内の主要な4保険業者、保険業者に再保険販売する国内会社、2国内事業者団体、国内の再保険ブローカー、およびロンドンの再保険業者が、被告保険業者の売りたい方針を守るため、他のいくつかの主要な保険業者に彼らの商業総合保険契約の期間を強制的に変えさせる様々な陰謀に関与することで反トラスト法に違反したと主張する訴えを提起した。

米国籍および英国籍

that the London reinsurers engaged in unlawful conspiracies to affect the market for insurance in the United States and that their conduct in fact produced substantial effect

ロンドンの再保険会社がアメリカ内の保険為市場に影響を与えようと違法な行為にengageしている 実際には彼らの行為が重要な影響を生み出している

検討中



あてはめ4、6~9

吟味なし

9

あてはめ結果

要件① 要件② 要件③ 要件(4) 要件(5) 要件⑥ 要件(7) 要件⑧ 要件⑨ 0 吟味なし 0 吟味なし 吟味なし 吟味なし 吟味なし ×

フリー概要

論拠2不当性

法の抵触の有無のみで域外適用可否を判断。米国特有の厳罰が世界中で認められてしまう危険性あり

論拠1正当性

国際礼譲を充分に考慮することで、他国 の事業者に不当な影響を与えない判断が できる

あるべき姿

各国企業のグローバルな事業活動の推進 ひいては円滑な外交関係の実現